

「設計・施工」一体

「組む相手が見つからない。他にも困っている建築家は多いと思う」

二〇一四年に「建築界のノーベル賞」と言われるブリツカー賞を受けた坂茂さんは憤る。強度を高めた紙の管を用いた「紙の建築」で国際的な評価が高い建築家だが、今回の公募には参加できそうもない。

旧計画のデザインコンペに参加した建築家の遠藤秀平・神戸大教授も「ゼネコンにラブレターを書いてるが『難しい』

と。案はできているのに、今のままでは99%無理」と嘆く。

事業主体の日本スポーツ振興センター(JSC)が今月一日に始めた公募では、二〇年一月の完成を目指し、設計からデザイン、施工まで一体で応募することを条件とした。旧計画のコンペで条件とした、著名な賞の受賞実績などは見送られたものの、建築家からは「前回以上に条件が厳しくなった」と言われる。今回は工事の難易度から、施工できるのは大手ゼネコン五

社(大林組、鹿島、清水建設、大成建設、竹中工務店)と準大手の数社だけとみられている。

その上、ゼネコン側には模様眺めの空気が漂う。大手のある幹部は「工費上限の千五百五十億円を守るのには厳しい。うちも本気で取りに行くことはない」と吐露。応募するゼネコンが少なければ、マッチングの可能性はさらに減る。

ゼネコン一社で何案も応募できるなら、いろいろな建築家と組めるが、一社当たり一案しか

応募できない仕組み。公募は十一月十六日までだが、前段階として、参加資格者を確定するための申請があり、今月十八日に期限が迫っている。

日本建築家協会の菅原太郎会長は「困った」という声は(坂さんら以外にも)何件かきいて」と説明。「ゼネコンと組めたかどうかだけで、審査の前段階でいくつもの可能性がつぶれることになる。数が出ないと競争にならず、公平でオープンなコンペにならない」と懸念する。

JSC広報室は、今回の公募方式を見直す可能性について「ルールとして決定された入札条件。既に公募も始まっている」と否定している。

1社1案限定

条件厳しく応募に壁

「新国立」建築家ら不満

二〇二〇年東京五輪・パラリンピックの主会場となる新国立競技場の事業者の公募で、建築家の間で「応募したくてもできない」という不満が広がっている。今回は設計と施工を一体で募る方式で、ゼネコンと組まなければ応募できないからだ。施工できるゼネコンも限られており、関係者の間では「このままでは二、三の案しか出ないのでは」と公募を危ぶむ声が漏れる。(森本智之、山口哲人)

建築家が新国立競技場の公募に参加する条件

旧計画 (デザイン のみの審査)	新計画 (デザイン、設計、 施工の一体審査)
1万5000人収容の スタジアムの設計 経験	1万5000人収容の スタジアムの設計 経験
もしくは ブリツカー賞など 国際的に著名な建 築賞の受賞	もしくは 1000人以上のホール (アリーナ、映画 館、劇場など)の設 計経験

加

ゼネコン(大手5社
プラスアルファ)と
チームを組む